



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	キリシタン文献の「ものなり」「ことなり」表現について
Author(s)	白井, 純
Citation	国語国文研究, 112, 70(1)-62(9)
Issue Date	1999-07-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94695
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_112_70-62.pdf



キリシタン文献の「ものなり」「ことなり」表現について

白 井 純

1. はじめに
2. 調査
 - 2.1 内容の分類
 - 2.2 述部が「①具象的名詞」である文
 - 2.3 述部が「②抽象的名詞」である文
 - 2.4 述部が「③モノ表現」である文
 - 2.5 述部が「④コト表現」である文
 - 2.6 述部が「⑤準体表現」である文
3. 考察
4. おわりに

1. はじめに

キリシタン文献をはじめとする中世の文献には、「なり」で終止する文末表現が多用される。これには(用例の引用に際しては句読点を適宜補い、特記する場合を除いて、すべて『どちりなきりしたん』(カサナテンセ本影印)から引用する)、

20ウ-17 それといふハ、しきさうあるよろづのさくのものハ、二のこんぼんをもてわがうしたる者也

40ウ-17 ひいですをうしなふみちハ、ひいですの事をいづれなりともしんじ奉らぬ事也

20オ-05 ds一もつなくしてつくり玉ふなり

15オ-15 おらしよハ、われらがねんをてんに通じ、御あるじ ds に申上るのぞみをかなへ玉ふみちはしなり

などがある。なかでもキリシタン文献に「ものなり」「ことなり」が頻用されることについては、同文献を一読すれば明白なのだが、どういう理由で「ものなり」あるいは「ことなり」が使用されるのか、という点についてはいくつかの立場があるようである。

姉崎正治(1932)は、「ものなり」はいわゆる文体上の理由から用いられた、文末修辞の一つだと考えている。また、『日本大文典』にみえるロドリゲスの見解も、おおむねこれに同じである。このことは、キリシタン文献に「ものなり」が頻用されることに注目したもので、福島邦道(1983)も「ものなり」と「ことなり」の用例数を計測

しつつ、この立場に沿った見解を示している。

いわゆる文体上の理由ということでは、東辻保和（1981）が広く中世の文献を視野にいれ、「ものなり」表現は筆者の立場や思想を主張する作品に、「ことなり」表現は事件・事実を客観的にうつす作品に多く用いられる」としている。また、東辻保和（1997）では、「ものなり」「ことなり」文が基本的に「AはBなり」という構造をもった判断文である点に注目し、Aを「主題部」、Bを「解説部」として、Bに用いられる「もの」「こと」が、意味的にAの内容と関連をもつかどうかを調査している。それによると、

「ことなり」で締めくくるか、「ものなり」で締めくくるかは、意味上に制約が存在し、最も自由なのは「ことなり」であって、主語構成要素が、概念コト概念モノのいずれの範疇に属しても、又存在が過去、現在、未来のいずれに位置附けられようと、それらに関係なく文表現を締めくくり纏めることが出来る。それに対して、「ものなり」には制約が存在する。即ち、主語構成要素が概念モノの範疇に属する場合には、存在が過去に位置附けられた文表現においては、それを「ものなり」で締めくくり纏める機能を持たない。但し、現在、未来に位置附けられた場合には、「ことなり」と同様に機能する。」（p.397）

ということで、過去についての表現では「ものなり」を使えない、ということを除けば、「主語構成要素」の内容と「ものなり」「ことなり」の使用はあまり関連がない、という結論である。

一般的には、「主題部」の内容がモノ的であれば「解説部」は「ものなり」、「主題部」の内容がコト的であれば「ことなり」になると考えやすい。ところが実際には、これに反する例が少なくないというのである。

本稿は以上をふまえ、原則としてキリシタン文献の『どちりなきりしたん』『サントスの御作業』『スピリツアル修行』『ぎやどべかどる』（すべて影印を用いる）に用いられた「なり」で終止する文をすべて調査対象とした。結果として、「ものなり」「ことなり」に加えて、「準体表現＋なり」「一般名詞＋なり」の四種が「なり」文の大部分を占めるが、これらを視野にいれて、文の主題との関連について考えることにしたい。

2. 調査

2.1 内容の分類

調査にあたっては、文の主部と述部との関係に注目している。たとえば、

12オ-14 此こゝろハ、あにまのあたとなるとがとしきしんのわざハひをのがしたまへといふこゝろなり

29ウ-17 みずからをかす事も、おなしとがなり

28オ-04 五にハ、ごしやうのみちハ、きりしたんのをしへにのみきハまるなり

などの文では、□で囲った部分が主部、下線を引いた部分が述部である。この主部と述部とは、述部位置に主部、主部位置に述部というように入れ替えても文意がとおるものを対象としている。

また、

38オ-12 みぎにいひしごとく、ぜじゆんといふ ハ、二の事にきハまる也

47ウ-13 真実の後悔といふ ハ、萬事にこえて御大切にぞんじ奉るべき ds をそむき
奉りたる所をかなしむにきハまるなり

などの文では、主部は見かけ上は準体表現になっているが、内容的にはそれぞれ名詞が顕在しており、「名詞＋と（いふ）」だと考えられるため、これは述部との関連を論じるうえでは、「と（いふ）」がないものと考えて扱っている。

このような基準から考察の対象とした文の主部と述部について、内容によって以下のような分類をおこなう。

- ①具象的名詞……「デウス」「御主」「天狗」「人間」「酒」などの一般名詞
- ②抽象的名詞……「オラシヨ」「儀」「心」「善」「後悔」などの一般名詞
- ③モノ表現………「人の下人たるもの」「科を犯すもの」など、さいごに「もの」を伴う表現
- ④コト表現………「悔い悲しむこと」「分別致すこと」など、さいごに「こと」を伴う表現
- ⑤準体表現………「強いて弁へんとする」「恩を受けて恩を知る」など、準体表現になる表現
- ⑥その他………「これ」「それ」などの指示代名詞、形容詞、のほか、主部については顕在しないもの

分類は、主部、述部ともに共通させて行うものとする。この意図は、「なり」表現をいわゆる文末の「ものなり」「ことなり」としてとらえるのではなく、

(主部・A)

(述部・B)

用言連体形＋(もの/こと/φ/一般名詞) は 用言連体形＋(もの/こと/φ/一般名詞) なり

としてとらえることにある(φは「準体表現」である)。また、主部については、顕在しないものが多数ある結果、「その他」に分類される用例が多くなっている。

調査は、以上の分類に基づき、主部の内容と述部の内容がどう関係しているのかを考えるものである。

2.2 述部が「①具象的名詞」である文

述部が「①具象的名詞」である文は、以下のような文である(述部相当部分に下線を付す。以下同じ)。

- 05ウ-08 御あるじの御辞に科ををかす者ハ、てんまのやつこなり、との玉ふなり
- 03ウ-01 これ、すなはちわれらがぜんせごせともにはからひ、ぜんあくの御へんぼう
をただしくあたへ玉ふ御あるじ也
- 04ウ-05 弟 きりしたんとは何事ぞや
- 師 御主 Jx の御をしへを心中よりひいですに受るのみならず、こと葉と身
もちをもてあらはす人也

これらの文の主部についてみると、以下のような内容になることがわかる(【表1】)。

【表1】述部が「①具象的名詞」である文の主部

	具 象 的	抽 象 的	モノ表現	コト表現	準体表現	そ の 他	計
どちらなさりしたん	1(6.3%)	1(6.3%)	1(6.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)	13(81.3%)	16(100%)
サントスの御作業	123(56.7%)	5(2.3%)	2(0.9%)	1(0.5%)	5(2.3%)	81(37.3%)	217(100%)
スピリツアル修行	39(44.3%)	13(14.8%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(1.1%)	35(39.8%)	88(100%)
ぎやどべかどる	18(43.9%)	0(0.0%)	0(0.0%)	4(9.8%)	1(2.4%)	18(43.9%)	41(100%)
計	181(50.0%)	19(5.2%)	3(1.4%)	5(1.4%)	7(1.9%)	147(40.6%)	362(100%)

ここで注意されることは、述部が「具象的名詞」である文の主部としては、「具象的名詞」が多く、「抽象的名詞」が少ないことである。述部が「具象的名詞」であれば主部も「具象的名詞」だ、という結果は、「AはBなり」文の構造を考えれば予想どおりの結果といえる。

2.3 述部が「②抽象的名詞」である文

述部が「②抽象的名詞」である文は、以下のような文である。

- 49ウ-07 此さからめんとハ、しするにのぞんでびやうにんのみにさづけ玉ふさからめ
んとなり
- 29ウ-14 あるひハ、中を違ひことばをかハさん事ハ、此まんだめんとをそむくぎなり
- 46ウ-11 しゐてわきまへんとするハ、いらざるのぞみなり

これらの文の主部についてみると、以下のような内容になることがわかる(【表2】)。

【表2】述部が「②抽象的名詞」である文の主部

	具 象 的	抽 象 的	モノ表現	コト表現	準体表現	そ の 他	計
どちらなさりしたん	5(3.9%)	36(28.1%)	1(0.8%)	0(0.0%)	1(0.8%)	85(66.4%)	128(100%)
サントスの御作業	32(10.2%)	61(19.4%)	1(0.3%)	38(12.1%)	15(4.8%)	168(53.3%)	315(100%)
スピリツアル修行	26(7.7%)	114(33.9%)	1(0.3%)	41(12.2%)	10(3.0%)	144(42.9%)	336(100%)
ぎやどべかどる	27(6.6%)	108(26.3%)	2(0.5%)	81(19.7%)	17(4.1%)	176(42.8%)	411(100%)
計	90(7.6%)	319(26.8%)	5(0.4%)	160(13.4%)	43(3.6%)	573(48.2%)	1190(100%)

ここで注意されることは、述部が「抽象的名詞」である文の主部としては、「抽象的名詞」と「コト表現」が多く、「具象的名詞」や「モノ表現」が少ないことである。これも、「AはBなり」文の構造を考えれば予想どおりの結果といえるが、「コト表現」が多く用いられていることから、「抽象的名詞」と「コト表現」の内容的関連も強いことがわかる。

2.4 述部が「③モノ表現」である文

述部が「③モノ表現」である文は、以下のような文である。

- 26オ-10 ちにおちたる五くくのたねハ、くさるといへどももとのみをしやうずる者也
 52ウ-13 されバ、ばうちずもとべにてんしやのさからめんとは、いづれのきりしたんもさづからずしてかなハざる者也
 46ウ-15 かゞみのわれハちいさきものなれども、それにうつるものハ、人のたけほどなるものハいふにをよはずたいさんにてもあれのこらずうつるものなり

これらの文の主部についてみると、以下のような内容になることがわかる（【表3】）。

【表3】述部が「③モノ表現」である文の主部

	具 象 的	抽 象 的	モノ表現	コト表現	準体表現	そ の 他	計
どちらなさきりしたん	12(16.4%)	18(24.7%)	1(1.4%)	1(1.4%)	0(0.0%)	41(56.2%)	73(100%)
サントスの御作業	328(53.9%)	36(5.9%)	5(0.8%)	6(1.0%)	2(0.3%)	23(3.0%)	608(100%)
スピリツアル修行	141(40.9%)	66(19.1%)	10(2.9%)	5(1.4%)	1(0.3%)	122(35.4%)	345(100%)
ぎやどべかどる	211(29.8%)	185(26.1%)	5(0.7%)	22(3.1%)	2(0.3%)	283(40.0%)	708(100%)
計	692(39.9%)	305(17.6%)	21(1.2%)	34(2.0%)	5(0.3%)	677(39.0%)	1734(100%)

ここで注意されることは、述部が「モノ表現」である文の主部としては、予想される「具象的名詞」「モノ表現」以外に、「抽象的名詞」と「コト表現」もあるということである。とくに、述部が「モノ表現」のときに主部で「モノ表現」よりも「コト表現」を多く用いているのは注目すべき特徴である。

2.5 述部が「④コト表現」である文

述部が「④コト表現」である文は、以下のような文である。

- 49ウ-17 此さからめんとハ、糸けれじやの御定のごとくつまをまうくる事也
 49オ-02 此しんじつのこんちりさんにいたるためにもつぱらたよりとなる事ハ、われらーさいのにんげん ds を大切に存じつかへ奉らずしてかなはぬだうりおほき事をしあんする事也
 43オ-05 よのさからめんとをうくる人ハ、せめてこんちりさんをもてうくべき事也

これらの文の主部についてみると、以下のような内容になることがわかる（〔表 4 〕）。

【表 4】述部が「④コト表現」である文の主部

	具 象 的	抽 象 的	モノ表現	コト表現	準体表現	そ の 他	計
どちなきりしたん	1(2.9%)	8(23.5%)	0(0.0%)	6(17.6%)	0(0.0%)	19(55.9%)	34(100%)
サントスの御作業	1(2.9%)	12(35.3%)	0(0.0%)	7(20.6%)	0(0.0%)	14(41.2%)	34(100%)
スピリツアル修行	0(0.8%)	46(34.6%)	0(0.0%)	10(7.5%)	10(7.5%)	66(49.6%)	133(100%)
ぎやどべかどる	4(4.0%)	56(56.6%)	1(1.0%)	13(13.1%)	3(3.0%)	22(22.2%)	99(100%)
計	7(2.3%)	122(40.7%)	1(0.3%)	36(12.0%)	13(4.3%)	121(40.3%)	300(100%)

ここで注意されることは、述部が「コト表現」である文の主部としては、予想どおり「抽象的名詞」と「コト表現」が多いことである。主題として「モノ表現」を用いることはほとんどない。

2.6 述部が「⑤準体表現」である文

述部が「⑤準体表現」である文は、以下のような文である。

- 25オ-09 そのつがひはきりしたん一人づつにて、かしらハ、らうまのたつときばつば
にておはしますなり
- 22オ-01 dsにておはします御ところハ、かハリ玉ふ事なくいつもおなしき dsにてお
はします也
- 36オ-14 それによてしやうじの人のためにみいさをおがみおこなハせ奉る事ハ、大き
なるくりきとなるなり

これらの文の主部についてみると、以下のような内容になることがわかる（〔表 5 〕）。

【表 5】述部が「⑤準体表現」である文の主部

	具 象 的	抽 象 的	モノ表現	コト表現	準体表現	そ の 他	計
どちなきりしたん	19(15.7%)	33(27.3%)	1(0.8%)	12(9.9%)	0(0.0%)	56(46.3%)	121(100%)
サントスの御作業	606(50.5%)	51(4.3%)	14(1.2%)	10(0.8%)	2(0.2%)	516(43.0%)	1199(100%)
スピリツアル修行	244(45.2%)	77(14.3%)	8(1.3%)	7(1.3%)	0(0.0%)	204(37.8%)	540(100%)
ぎやどべかどる	128(48.5%)	37(14.0%)	1(3.8%)	10(3.8%)	1(0.4%)	87(33.0%)	264(100%)
計	997(46.9%)	198(9.3%)	24(1.8%)	39(1.8%)	3(0.1%)	863(40.6%)	2124(100%)

ここで注意されることは、述部が「準体表現」である文の主部としては、「具象的名詞」が非常に多いということである。

3. 考察

以上の調査結果から考えると、「具象的名詞」と「モノ表現」の関係、および「抽象的名詞」と「コト表現」の関係が、用例数からみて密接であることがわかる。このことは、両者の内容上の親近性が現れたもので、半ば予想できる結果である。つまり(『サントスの御作業』は翻字して示す)、

サントスの御作業巻一 188-17 Sancto、心にこれを覚へ給へば、裸になり、身を御折檻あり、我と身に宣ふは、いかに驢馬、汝は、折檻に似合ひたるものなり、と

サントスの御作業巻一 226-18 Seleno、さらば、汝は知恵ある女なり。まず我が言葉を聞け、我、汝に仇をなさんと志は少しも無きといふ事、Deus を証拠にし奉るなり

49ウ-07 此さからめんとハ、しするにのぞんでびやうにんのみにさづけ玉ふさからめんとなり

49ウ-17 此さからめんとハ、ゑけれじやの御定のごとくつまをまうくる事也

などの用例をみれば、一方の「具象的名詞」が「モノ表現」に、「抽象的名詞」が「コト表現」に置き換えられたと考えるのは自然である。これは、主部と述部に両方に同じ名詞を用いるのは冗長なので、どちらかの名詞を内容に応じて「モノ表現」「コト表現」で置き換えるか、もしくは削除して「準体表現」にするほうが、表現上適切と思われるからではないだろうか。この際、主部述部とも「準体表現」にすると意味がとれなくなるおそれがあり、事実、そうした文は非常に少ないが、主部と述部でどちらの名詞を置き換えどちらの名詞を残すか、あるいは、どちらの名詞を削除しどちらの名詞を残すか、については、圧倒的に述部の名詞を置き換え・削除しつつ、主部の名詞を立てる傾向にある。

ところで、述部の「モノ表現」と「コト表現」では、予想に反する結果がみられる。それは、述部が「コト表現」であれば、主部が「モノ表現」になることは殆ど無いのに反して、述部が「モノ表現」のときには、主部が「コト表現」になることもある、という点である。したがって、述部「モノ表現」の「もの」が、直ちに「もの」という名詞固有の「者」「物」の意味を発揮して、主部の内容を置き換えているわけではない、と考えておく必要がある。

ここで、主部が「具象的名詞」である文の述部にみられる上位待遇表現に注目して考えてみたい。なぜなら、

53オ-16 ゑすてれまうんさんのさからめんとをさづかりたる人、そのわづらひよりくはいきをえていご又りんじうの時にをよんでさづかる事もかなふ者也

17ウ-11 御主 Jx のあぼすところたち、すびりつさんとの御導きをもて一所にあつまり
玉ひて、御あるじ Jx の御くちよりぢきにきき奉られたるむねをつらね玉ふ
ものなり

などの文では、上位待遇表現を含む述部「モノ表現」の「もの」は、名詞としての「者」「物」ではないことは明らかである。なぜなら、「者」は当代において、上位待遇の対象となるような名詞をさす代名詞としては用いられないからである。

以上の理由から、主部が「具象的名詞」である文に限って、述部の「モノ表現」と「準体表現」を上位待遇表現の有無によって比較した結果は以下のとおりである（【表 6】）。

【表 6】主部が「具象的名詞」である文の述部

	述部に上位待遇あり		述部に上位待遇なし	
	モノ表現	準体表現	モノ表現	準体表現
どちらなぎりしたん	5(22.7%)	17(77.3%)	7(77.8%)	2(22.2%)
サントスの御作業	147(26.7%)	403(73.3%)	175(47.0%)	197(53.0%)
スピリツアル修行	115(48.9%)	120(51.1%)	90(62.9%)	53(37.1%)
ぎやどべかどる	120(52.6%)	108(47.4%)	88(82.2%)	19(17.8%)
計	387(37.4%)	648(62.6%)	360(57.1%)	271(42.9%)

ここから明かなように、述部に上位待遇表現を含む文は、述部で「モノ表現」をとらずに「準体表現」をとる傾向が強いことがわかる。ここには、述部を「準体表現」として、名詞としての「者」と上位待遇表現の不一致をさける意図があるのではないだろうか。しかし一方で、上位待遇表現に「モノ表現」が下接する例も少なくないことも認めなければならない。したがって、「モノ表現」の「もの」は、名詞としての「者」「物」の意味を保持して用いられる場合と、それらの意味を失っている場合の二つがあり、キリシタン文献では、この二つの用法が混在しているものと考えられる。

4. おわりに

本稿では、「なり」文の主部と述部は、基本的に内容上関係のあるものが並べられることを確認した。このことは、「なり」文が「AはBなり」であると考えれば、十分に予想できる結果である。ところが、述部の「モノ表現」については、主部との内容不一致、あるいは述部の上位待遇表現にもかかわらず用いられた例の少なくないことから、主部の内容の置き換え・省略とは別の理由で用いられたと考えられる。

この理由については、未だ明確な結論を得ていない。「ものなり」表現は語り手（書き手）の意図を反映させるもの、との解釈もあり得ると思う。しかしそれ以上に、当代の文法的事情から考えるのがいいように思う。というのは、当代は準体表現の衰退

時期にあり、これに代わる表現（つまり、準体表現を目に見えるかたちで体言化する表現）が模索されていた時期である。この表現は、近世期に「の」「のだ」表現として確立する、いわゆる準体助詞として今日につながるわけだが、この表現の確立以前に、これに先行するかたちで、「モノ表現」があったのではないかと思うのである。もちろん、いわゆる準体助詞「の」と「モノ表現」では、これを直ちに同一視することはできないとしても、準体表現の衰退が長期に渡る不自然さから考えて、名詞としての意味を失った名詞「モノ」を用いる「モノ表現」が、準体表現を回避する代替手段の一つとして機能していたとの可能性も否定できないと考えている。

〈参考文献〉

- 東辻保和 1981 「中世における「ことなり」「ものなり」表現について」『国語史への道（上）』三省堂
- 東辻保和 1997 『もの語彙こと語彙の國語史的研究』汲古書院
- 姉崎正治 1932 『切支丹宗教学』同文館
- 福島邦道 1983 『続キリシタン資料と国語研究』笠間書院
- 小島幸枝 1971 『どちらなかりしたん総索引』風間書房
- H. チークリス／福島邦道／三橋 健 編 1976 『サントスの御作業』勉誠社
- 林田 明 1975 『スピリツアル修行の研究 翻字影印篇』風間書房
- 天理図書館善本叢書 1976 『きりしたん版集一』八木書店
- 天理図書館善本叢書 1976 『きりしたん版集一 附録』八木書店
- （しらい じゅん・北海道大学助手）